

活字翻刻本のこと

磯部 敦

江戸期の読み物が明治になって翻刻出版されること、奥付にその原版者が明記される場合がある。以下に数例を掲げる。『大和荘子蝶膏筭』（明治十九年二月二十一日翻刻出版御届／同年三月発行）は出版人に村上真助、発兌書肆には鶴声社森仙吉などが名を連ねるが、原版人には望月誠（兎屋主）が明記される。兎屋版『大和荘子蝶膏筭』（明治十七年五月二十四日出版御届／同年六月発行）と紙型を同じくする同版である。

また大阪の老舗である岡田茂兵衛や前川善兵衛などの名もよく見かける。例えば上田屋版『俊寛僧都島物語』（明治十六年十月九日出版御届／同十八年四月再出版）や辻文版『絵本玉藻譚』（明治二十年六月六日翻刻御届）などに岡田茂兵衛の名が、自由閣版『昔語質屋庫』（明治十九年九月二十日翻刻御届／同年十月出版）などには前川善兵衛の名が記されている。このような情報が明記されることによって、その翻刻本の底本

や校訂人、版元間の繋がりとといった書物作製の舞台裏をうかがい知ることが出来るのである。しかし多くの活字翻刻本においては、このような情報は明記されていない方が珍しく、多くの場合「翻刻出版 東京稗史出版社」とだけであったり、「原版人 不詳」などと素っ気ないものである。つまり版元に直接つながる一次資料や奥付情報などが無い限り、舞台裏をうかがい知ることがほとんど出来ないのである。

ところで、上記以外の情報から舞台裏へもぐり込み得ることもある。下記の二つの例は、東京稗史出版社の翻刻本が他書肆発兌の翻刻本に関わったと思われるものである。

一点目は鶴声社版『三七全伝南柯夢』（明治十七年十二月十六日翻刻御届）である。奥付には「原版人 岡田茂兵衛／大坂博労町」とあるのだが、序文に東京稗史出版社の名を見つけることが出来る。すなわち、

「明治壬午秋。東京稗史出版社屬。月痴生書」なる序文が翻刻されているのである。しかし、この序文から東京稗史出版社版が翻刻本作製の際の底本となったと見るのは即断に過ぎよう。本文表記が東京稗史出版社版のそれとは多く異なるのである。おそらく底本は奥付通り岡田茂兵衛であつたであろう。そして東京稗史出版社版は校合本として用いられたものと推測する。因みに、序文の板下を担当した「月痴生」は、東京稗史出版社版『南総里見八犬伝』（明治十五年十一月十三日翻刻御届）、『昔語質屋庫』（明治十六年四月七日翻刻御届）でも板下を書いており、また東京同益出版社版『繪本太平記』（明治十五年十一月十一日出版御届）にも「皇靈祭日應東京同益出版社主中村頼治君清属／月痴迂生書」とある。この人物が何者であるのか寡聞にして知らず、情報をご教示いただきたくここに記した次第である。

二点目は駿々堂版『夢想兵衛胡蝶物語』（明治十六年八月二十四日翻刻御届／同年十一月三十日出版）である。厳密な校訂を宣言した東京稗史出版社であつたが、²『夢想兵衛胡蝶物語』（明治十五年九月六日翻刻出版御届）には唯一

点の校訂ミスがある。後編巻之二の八丁表七行目「雲ハ豊年の貢とぞいふなる」の一文がそれである。「雲」のルビが「ゆき」となっているのだが、正しくは「雪は豊年の貢とぞいふなる」である。そして同箇所同じ誤りを持つものが、駿々堂版なのである（後編巻ノ二の一頁九行目）。その他、扉は東京稗史出版社の見返しを模してあり、口画や挿画も同様である。画師は芳影であるが、口画の「應需芳影瀉」という書き入れより模写したものであることがうかがえよう。これらことから駿々堂版の底本には、東京稗史出版社版が用いられたと断定し得るのである。例えば、右の駿々堂版が製作される現場を考えたとき、東京稗史出版社との間に何らかのやりとりがあつたとは思われない。これらは本が方々に出る過程でうまれた、いわば流通の産物なのである。流通網は版元から小売りを経て末端の草紙屋へ本が流れるといった固定的な機構であつたわけでなく、媒体が版元にもなり得る流動的な機構であつた。³売れるもの、流行のものと見るや即座につくり、流すことが出来たはずである。駿々堂の所行はこういった流

通事情の中で捉えねばならないし、また似たような事例が多く埋もれていることは想像に難くない。この時期、夥しい数の翻刻本は「海賊版」という語のもので語られることが多いのだが、それらが公然とまかり通っていたのも、斯様な流通事情があつたからなのである。そして、翻刻本のほとんどが無版權であり法の網に触れることがなかつたこともまた留意すべき点であろう。

注

1 『南総里見八犬伝』第四輯上、及び第七輯上では「月痴迂生」となっているが、「月痴迂生」の誤記であろう。また『夢想兵衛胡蝶物語』では「ゆめのや主人月痴生」とある。

2 明治十五年の初頃に配布されたと思しい「豫約購求方法書」第三条に「諸大家ノ檢閲ヲ乞ヒ最モ校正ニ注意シ一字一点ノ誤脱ナカラシムベシ」という文言がある。

3 鈴木俊幸「草双紙論」（『紀要——中央大学文学部——』文学部第七五号・一九九五年二月）

（中央大学・大学院生）